

いわむろのみらい

現代GP 「いわむろのみらい」創生プロジェクト

特集
新メンバー加入！
岩室煎餅

活動報告 1 (後期プロジェクト紹介) ◇ 2

活動報告 2 (岩室を訪問) ◇ 4

つい手が伸びる岩室せんべい ◇ 7

石添邦彦さん ◇ 8

編集後記 ◇ 8

岩室温泉のジェラート屋「レガーロ」の近くにある田んぼで、稲の収穫が始まっていました。穂の重みで稲が倒れている光景が至るところで見られました。新米も楽しい「食」の秋がやってきました。

活動報告 1

後期プロジェクト紹介



光の環境デザイン

面出教授／空間演出デザイン学科

都会に失われた光の美しさを再生する事で岩室の魅力を夜にまで増幅していく提案である。昼間の見慣れている景色が日暮れになると、光の演出により美しい温泉郷へと一変する計画である。

●10月の視察では…
夜、岩室温泉街でライト
アップイベントを行う。

地場産品デザイン

十時教授、伊藤専任講師
／工芸工業デザイン学科

岩室温泉で生産される様々な素材を用い、空間全体としての商品を体験する場を目指す。地域に根付いた温泉街のイメージづくりをしていくと同時に、具体的に商品・作品を制作して提案していく。

●10月の視察では…
ホテル、旅館に足を運んで、
アメニティグッズや浴衣な
どのリサーチ。

メディアデザイン

森山教授／デザイン情報学科

岩室と大学で一丸となってプロジェクトを行っていくのに必要な、両者をつなぐメディアをつくる。これまで7冊発刊された「いわむろのみらい新聞」に続き、活動全体を取材する。現在、8-12号の発刊を計画している。

● 10月の視察では…

- ①女将さん、かっぽうぎ隊の方へインタビュー。
- ②岩室中学の活動について調べる。

コア※

※正式名称は「プロジェクトコーディネーション及び観光複合施設運営計画」です

宮島教授／デザイン系5学科学生

各チームが行う「いわむろのみらい」創生プロジェクトにおける様々な計画に対し、コアコンセプトに沿ったトータルコーディネートを行う。また、平成22年オープン予定の観光複合施設の運営、及び関連するデザインを提案する。

● 10月の視察では…

①刃物、ステンレスの技術
見学をするため燕三条を訪
れる。

②旅館庭園の調査。



サイン

後藤教授／視覚伝達デザイン学科

岩室へのアクセスを重点に将来構想に寄与するような街づくりの観点にたったサインシステム（標識、マーク）を計画する。サインとしてピクトグラムと地図を制作し、人の導線とサインとの関係をシミュレーションし、提示する。

● 10月の視察では…
実寸のレプリカを用いて標識の見え方を実験。

ワークショップ

齋藤教授、花崎非常勤講師
／視覚伝達デザイン学科

「暮らしと人」をテーマに岩室スタイル街づくりを目的としたコミュニケーションワークショップ(体験共同学習)を計画し実行、記録する。そして学校の体験学習プログラムとして活用されることを目指す。

●10月の視察では…
岩室中学の生徒と陸会の方
と一緒に公会堂でワーク
ショップを予定。

道

長尾教授／建築学科

山・川・海・田畑などが身近にある事から、自然の四季の豊かさが感じられる道を目指す。また日本のふるさと、「懐しい和」をイメージに道空間、景観造りを提案する。

● 10月の視察では…

- ①引き続きメインストーリーの街並みを調査。
- ②街角広場がどの場所に展開できるかを探さず。

サウンドスケープ

白石教授／音楽学演習

岩室の魅力を音という視点から再発見する。住民との交流を通して、残したい音、よみがえらせたい音、新たに生み出したい音を見つけ、岩室にふさわしいのサウンドスケープ（音風景）を提案する。

● 10月の視察では…
夜に下駄を履いて、温泉街らしい音づくりの検証。

活動報告2

岩室を訪問

訪問1日目(9/15) 文・伊藤聡里

秋の岩室へ

猛暑も一段落してようやく秋の風が変わり始めた9月中旬の15日から17日、武蔵野美術大学の学生が岩室を訪れた。前回6月に足を運んだ時とは一変、緑の田んぼは黄金色へと衣替え。稲穂が実り、農家の方々は収穫時期真っ只中で、至るところで忙しく動くコンバインの音を耳にした。学生たちは到着後、3日間お世話になるホテル・旅館を訪ねるやいなや、早速まちの中を歩いてその雰囲気を感じ取っていた。夕方からは公会堂に集まり、地元住民の方々の顔合わせに臨んだ。

合同会議

1日目の初めに行われたのは第5回合同会議。後期のプロジェクトチームは、「プロジェクトコーディネーション及び観光複合施設運営計画」「道計画」「サイン計画」「ワークシヨップ計画」「光の環境デザイン計画」「地場産品デザイン計画」「サウンドスケープ計画」「メディアデザイン」の計8チームである。前期から半数以上入れ替わり、新たなメンバーで挑む。今回は51名の学生、教職員が、い

わむらみらい研究会の方々、行政の方々との顔合わせを行った。初めて来た人のことも考慮した、親しみやすい自己紹介が続き、会議は穏やかな雰囲気が進められた。また「岩室でこんなことがしたい」「このような岩室になつてほしい」など、それぞれの立場からの意見交換も活発に行われていた。みらい研究会の渡邊さんの挨拶では、岩室の歴史が取り上げられたが、これは、各プロジェクトチームが岩室の地域に合ったものを制作するにあたって歴史は重要な役割を占めてくるという配慮からであろう。また2009年



度のNHK大河ドラマ「天地人」に登場する天神山周辺の史跡の紹介もあり、今後岩室がますます活気づくきっかけになると学生が喜ぶ様子が見受けられた。

かっぱうぎ隊のおもてなし

会議終了後、お揃いの手ぬぐいを巻いた、かっぱうぎ隊の方々が手作りの夕食をもてなしてくれた。岩室でとれたきゅう

りとなすの漬物、お刺身、お団子とご馳走を振舞ってもらったのだが、やはり米の名産地だけありおにぎりの味は格別である。手づくりの味に学生はおいしいと声をそろえていた。温かいもてなしに学生たちは緊張がほぐれ、終始和やかな雰囲気の話話会となった。

座談会

夕食後は地域の方々と合同で、お酒を交えながらの座談会が設けられた。合同会議で聞けなかった岩室の日常、歴史、産物、工芸品についてなど話

は尽きなかったようだ。岩室が昔、会社等の接待の場所に使われていたことや、芸子の多くいた街であったこと、岩室を訪れる客層についてなど、これから各チームが活動するにあたって関わってくる貴重な話題が多く出た。また、中越沖地震の際に、連絡をしてくる学生が多かったことも話題となった。「心配してくれて、ありがたい。」とにこやかに語ってくれ、岩室の方と学生の交流の深さが感じられた。

計画の中心になるメインストリートについては、もう少し温泉街としてのムードがあったほうがいいとの意見が出た。道のムードを演出するには照明や、周りの音も重要な役割を担うため、道に携わる全てのチームの協力が企画成功のカギとなるだろう。

後期は今まで以上に各グループが密にコミュニケーションをとることが大切になりそうだ。実際、あちこちで連絡先を交換している姿が見られた。初めて来た学生も、そうでない学生も深く交流できた良い座談会となったのではないだろうか。

右も左も絶景

2日目は早朝から伝承館に集合し、学生、教職員で弥彦山へバスツアーを行った。弥彦山スカイラインに乗り、山頂展望台へ向かう。そこで学生たちを待ち受けていたのは、朝のきりりと引き締まった空気と晴天の下に広がる越後平野だった。岩室全体を取り巻く緑が、地図とは全く違う実寸大のスケールで目に飛び込んでくる。振り返ってみると、そこに広がるのは、どこまでも続く青。大パノラマの日本海である。右も絶景、左も絶景。一度に2つの眺めを楽しめる弥彦山は、早朝ということもあり、どこかぼんやりとした身体に爽やかな目覚めを与えてくれて、各チーム本格始動となる視察2日目スタートした。

道に情緒を

弥彦山から温泉街へ戻り、各チームそれぞれの活動に取りかかる。「サイン計画チーム」が行ったのは、場所の名称と矢印を書いたシンプルな標識を使用

訪問2日目 (9/16) 文・濱 裕斗

まちの魅力を 探った一日

岩室に“華”を

も丹念に歩いて回っていた。

裏道に目をやると、静かに聞き耳を立てている「サウンドスケープチーム」を発見。神社、池などを回り、まちの音を収集して、言語化する。同じ場所でも時間帯で音が変わるというところで、時間帯を変えて何度も調査をしていた。また、地元の方

旅館や上原酒造、宝山酒造を回り、現在売り出されている土産物や産物を調べ、岩室に足りないものや欲しいものを研究し、制作に反映していきたい考え。「コアグループ」は、観光複合施設を立ち上げる際に必要な土産物を調べるため、1年を24分割して岩室の細かい季節ごとの産物を探していた。それらは今後、産物カレンダーとしてまとめられる予定。このカレンダーは季節を活かしたイベントなどを展開する際にも使っていく、という話だ。

人の“輪”をつくる

「ワークショップチーム」は

岩室中学校を訪れて交渉したところ、10月末に中学生とワークショップを行うことが決まった。中学生も総合学習でまちづくりの勉強や調査を行っているので、お互いに良い情報交換の場にもなっていくだろう。また、以前から交流のある民家の方へのインタビューや道行く人に突撃インタビューを行うなど、岩室の人と積極的に触れ合おうという姿勢が見られた。ワークショップの目的は人と人を繋ぐこと。これからどのように人を結びつけていくか注目したい。

して、標識の必要な場所・不要な場所、見え方や環境への配慮についての調査だ。標識は、観光客の出入りや事故率の減少などに大きく関わってくるため、慎重な調査が必要である。メインストリート沿いを賑やかにパシャパシャと写真を撮って歩く集団がいた。「道チーム」である。彼らは道沿いを隙間なく写真に収めることで、緑の多い場所、少ない場所、旅館、民家、商店などの位置関係を把握し、分類したいと考えた。調査はメインストリートに留まらず、裏道

裏道に目をやると、静かに聞き耳を立てている「サウンドスケープチーム」を発見。神社、池などを回り、まちの音を収集して、言語化する。同じ場所でも時間帯で音が変わるというところで、時間帯を変えて何度も調査をしていた。また、地元の方



旅館では何やら「地場産品チーム」が調査している模様。彼らは

「メディアチーム」は地元の方から見る岩室の魅力を探るため、女将さん3名、ほてる大橋の石添さん、お煎餅屋さん3軒にインタビューを敢行した。また、ニュースレターを置いていただけるよう旅館・ホテルへの依頼・交渉するなどして、まちづくりプロジェクトが少しでも広まるように努めた。

こうして、各チームが精力的に活動した2日目。チーム単位ではほぼ丸1日動くことができたため、充実した調査を行うことができたと言える。

旬の味覚に舌鼓

秋の魚を盛り合わせたお刺身や、松茸、漬物、山菜に今年収穫されたばかりのお米など、旬の食材を使ったお料理を楽しませていただいた2日目の夜。昼間には地ビールやワイン、地酒を調べるために足を運んでいたチームもあり、岩室地域ならではの味に出会うことができた。宝山酒造では難しいと言われていた新潟米コシヒカリで仕込んだ純米吟醸の製造に挑戦したお話を聞いたり、観光複合施設で販売するオリジナルのお酒を作る可能性について質問する学生もいた。

“人と自然”を体感

連日天候にも恵まれて、迎えた最終日。「ワークショプチーム」はメンバーが多いことを活かしてグループを分け、温泉街を中心にさまざまなところへ足を伸ばし、まちの人に突撃インタビューを試みて住民の方の声に耳を傾けていた。「コアグループ」の観光複合施設



設を担当しているメンバーは、ホテルや旅館、商店で販売されている産物を調査。どの品がいつ頃出回っているのか、お店の方々に伺っていた。「道チーム」は、メインストリートに的を絞って街並みを写真に収めていき、どんな景観にしていきたいかを考えていた。「メディアデザインチーム」はホテルや旅館を巡って、ニュースレターをロビーなどに置くことができるかどうか訪ね歩いた。

「サウンドスケープチーム」は2日目に引き続き、時間帯を分けて、まちの音を一つひとつ集めていった。昔聴かれた三味線や下駄の音は、今日では一歩外へ出てしまうと聴くことが

できない。メインストリートの交通量は増え、昼間は車の行き来する音が多い。このチームではかつて岩室にあった音を住民の方に尋ね、温泉街らしい音を呼び戻せるか模索していた。また、岩室神社などがある山沿いの静かな場所でも聴かれる虫の声など、自然の音を楽しむことが出来るスポットを、岩室の名所として地図の中で紹介していく案が出ている。

訪問3日目(9/17) 文・西村奈都子

残していきたい “岩室”

お昼頃に伝承館を発って訪れたのは夏井のハザ木と弥彦神社。夏井では9月の稲刈りをする時期になると、田んぼの畦道に沿って生えた木と木の間に縄を渡し、そこへ刈り取った稲を干して並べる。かつて岩室地域ではよく見られる光景だったそうだが、その風習が次第に廃れていった。黄金色の屏風が風になびいて揺れる美しい景色を後世に伝えたい、という地元の方の働きかけで、今日でも夏井などの一部地域で見ることが出来る。ムサビの学生たちが訪れた9月はちょうど収穫時期にあたり、その光景を目にするのが叶った。



夏井のハザ木に見送られて

最後に訪れたのは弥彦神社。大きな朱色の鳥居に迎えられて木々で覆われたトンネルを歩いていると、11月に行われる菊まつりの準備をしているところに鉢合わせた。御参りをすると、名残惜しみつつも、新潟から東京まで約6時間程バスで揺られながらの帰路についた。

最後に訪れたのは弥彦神社。大きな朱色の鳥居に迎えられて木々で覆われたトンネルを歩いていると、11月に行われる菊まつりの準備をしているところに鉢合わせた。御参りをすると、名残惜しみつつも、新潟から東京まで約6時間程バスで揺られながらの帰路についた。

ほら、また一枚！

岩室
ほっ
芳

つい手が伸びる 岩室せんべい

「懐かしい味を守る」

9月16日、17日の2日間に亘り、岩室温泉街にお煎餅屋さんを構えている岩室製菓さん、小富士屋さん、重の屋さん3軒を訪ねた。

3軒とも一様に語ってくれたことは、人の「手」で作ること。岩室製菓、重の屋ではタネを仕込むところから焼いて形を整える工程の全てを「手」で作っている。同じ調査であっても、人によって、その日の調子によって焼き上がり具合が異なってきた味も深い。そしてまた、小富士屋では多くの方に同じ味を届けるため焼く工程に機械を取り入れているが、仕上げはやはり人の目で確かめ、「手」を入れる。岩室製菓は口当たりが柔らかくほんのり甘く、小富士屋は軽いサクッとした食感の温泉煎餅、重の屋は香ばしい仄かな甘さが特徴だという。夏になると焼き場は40度で汗だくになりながらやっていた」と手際よくお煎餅の型を反しながら語って下さった。

現在では県内だけでなく、遠く北は北海道から南は九州まで、それぞれの煎餅の味を求めて買われる常連さんもあるそうだ。中高年の方々を中心に、かるめ焼きや新潟で祭の屋台などで売られるポッポ焼きを思わせる味が、懐かしさを覚える所かもしれない。

「こだわりの素材」

岩室煎餅は「草加せんべい」のように岩室にも名物の味を作りたい、という経緯で始まったそうだ。小麦粉と砂糖をベースに、岩室製菓ではそのシンプルな原料にこだわり続けている。重の屋では粗目糖を使い、時間をかけて仕込みをされている。また、小富士屋では地元で取れる温泉の源泉を使い岩室ならではの素材を取り入れ、独自の風味が感じられる。



小富士屋の桑の葉煎餅（上写真）

重の屋のご主人。（左写真）

メディアデザインメンバーが煎餅を焼く体験をした。熱い型に素早くタネを流し込む作業が想像以上に難しい。最後は焼きたて煎餅をシソの葉と酢を混ぜたジュースと一緒に。



「時代の変化とともに歩む」

「昔は岩室の道を通ると温泉地独特の香りがした」とおっしゃっていた小富士屋のお姉さん。今では温泉を引いてくる場所が変わり、さらつとしてサツパリした香りになったそうです。源泉を使うことの他に、新たな味への挑戦をなさっていて、桑の葉を使った甘さ控えめの大人の味を提案。桑の葉は糖分を体外に出す働きもあるそうで、健康にも嬉しいお煎餅だ。

煎餅を作る際に欠かせない型は創業当初から変わらないう、という岩室製菓と重の屋。型の絵柄には岩室甚句や芸妓さん、良寛など歴史を感じられるモチーフが描かれており、最近のものではローブローウェイの絵にローマ字でIWABUROと掘られたものや、ゴルフ場、間瀬の海岸などもあり、お煎餅もまた時代とともに様々な岩室の表情を見せてくれる。岩室温泉街名物の三者三様の煎餅は、刻々と変化してきた岩室の姿を映し出す、人の温かいさと心意気を感じる名物菓子だろう。



岩室製菓の奥さん

生まれ変わり、新たに進む岩室の未来



ほてる大橋 代表取締役 石添邦彦氏

洋食レストラン「めいぶる」・「鉱石ミネラル風呂 嵐の湯」の運営を通してお客様に最高の感動と満足を与えるおもてなしを実現させている。

時代は変わる、岩室も変わる

岩室が変わったというより時代の变化でしょうね。昔は全国でも芸者さんの文化がある温泉は多かった。要は接待の場所、女性や子どもが来られる場所ではありませんでした。今では客層が様変わりです。学生時代、横浜に住んでおりまして、箱根や伊豆といった他の観光的な先進地を見たあと岩室へ帰ってきたとき、確かに当時の岩室はもの凄く繁盛していましたが、しかしそれは長い目で見れば危険な状態であろうと察知しており

ました。ご夫人からファミリー、ご年配の方、あらゆる層のみなさんにおいていただける、要は健全な岩室温泉をこの先描いていかないと失敗してしまうだろう、と。他の温泉地でも、風俗的な営業を主としていたところはたくさんあり、そういったところが変化を遂げて、健全な温泉地だと認知されるまで随分苦労していましたので、大変なことは承知の上でした。けれど今現在の岩室は、産官学共同でプロジェクトが発足してムサビの

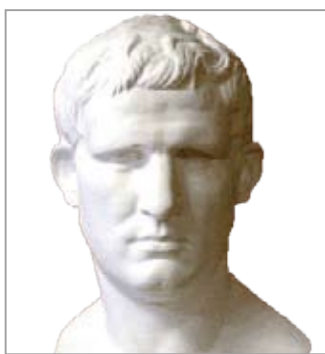
みなさんをお迎えできる時代が来ました。何十年という時代を経た結果の姿ですよ。

またホテルのシーズンになると、1万、2万といった人たちがいらつしやるようになりまして。そういう状態をつくるまで、いわむろのみらい研究会を筆頭に、地道な努力がありました。私以上のお年のお客様が、ホテルを見て感動して子どものようにしゃいで帰っていきます。生まれて初めてホテルを見たつて。そういう姿に接した時には、自然に触れていただくということの大切さを感じます。

私どもの経営理念は、「お客様満足、社員満足」です。お客様に満足していただきたい。そのためには社員も満足していかなくてはならないという、「人こそが財産」という考え方です。これは難しい追求だと思えます。でも、オーナーとして絶対外さない、外してはならないことだと考えています。人との出会いがやっぱり人生素敵な、って。社員が褒められることが一番幸せです。

リレー ② 編集後記

文＝志村享史



夏休み明け、学校に行ったとき久しぶりに会った友達にアグリッパ(写真参照)に似てるって言われました。美大生の入門として描く石膏であり、偉大な古代ローマの軍人であった彼に似てるって言われた僕は素直によるこんでいいのかわかりませんが、さぞ喜ばしいことなんでしょう。しかし、あまりに遠い御人なので実感が湧きません。

今回は二回目の視察に行き自分のなかにいわむろがすっかり定着してきました。景色も見覚えのあるものとなり、実家が東京にしかない僕にとって、故郷という感じ

に馴染んできています。行くたびに良い思いをさせてもらい、今回はホテル大橋の嵐の湯、岩盤浴というものに初めて入り、気分も爽快でした。良い経験ばかりさせていただき、行くたびにいわむろという存在が大きくなっていくのを感じます。しかし、良い思いをさせてもらってるばかりではいけないので、僕もいわむろをよくするために貢献していきたいと思っています。僕はアグリッパのような歴史に名を残せる程のものではありませんが、そのくらい偉大なことをするつもりでこれからも、「いわむろのみらい」創生プロジェクトをがんばっていききたいのでこれからもよろしくお願いします。

発行日 2007年10月30日
発行元 「いわむろのみらい」創生プロジェクト
メディアデザインチーム
編集長：西村奈都子、副編集長：濱祐斗
デザイナー：石田真郷、河内奈緒
ライター：伊藤聡里、長舩仁、志村享史
連絡先 〒187-8505
東京都小平市小川町1-736
武蔵野美術大学／研究支援センター
Tel & Fax 042-342-7263
URL <http://www.musabi.ac.jp/iwamuro/>

©「いわむろのみらい」創生プロジェクト

「いわむろのみらい」創生プロジェクト